

---

# ミストリア

咲桜時雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミストリア

### 【Nコード】

N5419W

### 【作者名】

咲桜時雨

### 【あらすじ】

警察とは異なる警察組織の物語。

## 名探偵？

「……お1つお聞かせ願いたい、本田閣下」

警察が慌しくこの大きな屋敷を捜査している中、見た目は15歳ぐらいで身長は低く可愛らしい顔立ち。

事件現場に新人警官とは思えない、制服も着ない私服を身に纏った青年は

かなり太った上に、私は金持ちだと言わんばかりの赤く分厚いバスローブを纏った閣下と呼ばれる男に尋ねた。

「なんだ」

「貴方はたまたま、自殺が起きて密室だった2階の窓の下の何も無い庭を散歩していた……ということですか？」

「そうだと言っているだろう！ なにか自分の庭を散歩してはいけない訳があるのか？」

「自分の家で著名人を呼んだパーティーをしているのに主催者が庭を散歩ですか、……一般市民には理解できませんねえ、羨ましい限りです」

青年のその言葉に含まれる意味は、あからさまな嫌味だった。しかしそれでも本田閣下は嫌味ったらしく言い返してみせた。

「なに、その一般市民とやらには分からないだろうがね、肩が凝るのだよああいう連中は、なんせ頭が固い上に融通が利かないからな、少し息抜きでもしなければやっていけないのだよ」

「ええ、やつらはもうちょっと融通を利かすべきです」

「まあしかし私も君の言うその、やつら、の中に入るのだろうかね」  
「……そうでしたか、ではぜひ融通をの利く日本を作ってください」

「ああ、で話しはそれで終わりかね？」

「なにをバカな事を仰って……しつれい、話を戻しましょう、散歩中に聞いた物音で、2階で物音がしたと騒ぎながら慌てて屋敷へ戻り、2階の音がした部屋に駆けつけたら今野氏が密室で自殺して

いたと言う事で間違いないですね？」

「ああ」

「偶然たまたま歩いていたら、2階で首を吊って自殺をした物音が聞こえた？」

「……なんなんださっきからその態度は、私を疑っているのか」

流石に、青年の態度に少々苛立って来た様子だ。

「お気に触ったのなら謝ります、閣下が殺人なんて！ あの閣下がそんな……」

「貴様は確か、刑事になりたての新人だったな！ 何の権限があつてそう突っ掛かってくるんだ！」

「……形式的ですよ、やっておかないと上司がうるさいもので、あの人も融通が利かないから」

「気に喰わないんだよその態度！ 私を誰だと思っているんだ！」

「僕はさっき仰いましたよね、貴方の事を本田閣下と、だったら誰だと聞かれれば貴方の名前は本田さんでしょう？」

一々偉そうに怒鳴ってくる本田閣下に、青年は段々とあからさまに挑発的な態度を示して来る様になって行った。目の前にいる相手に恐れる様子も遠慮する様子も全く無く。

「名前は！」

「はい？」

「名前は何だと聞いているんだ！」

「僕ですか？」

「それ以外誰がいる！」

「……冬穰 凜ですが」

「よく覚えたからな！」

「ええ、光栄です」

よほど頭に來たらしく、閣下は顔を湯気が出るほど真っ赤にして、隣りで黙って冬穰の話しを聞いていた担当刑事に怒鳴りつけた。「とっとと連れて帰れこのガキを！」

「い、いえ、それは……と、冬穰を許してはいただけないでしょう」

か？」

この担当をしている刑事の態度がさきほどからがやけにおかしい、話しから察するに相当高い地位にある相手にこんな態度を取る冬穰と名乗る新人刑事を見逃した上にやけに保護する。しかし当然それは本田閣下の怒りに油を注ぐ行為だった。

「もうこの事件は終わりだ！ 自殺だ！ とっとと出て行け」

「……ダメですよ、貴方は怪しすぎる」

そんな相手の怒りが頂点とも言って状態になった閣下に、遂に冬穰は今まで少しは使っていた腰の低い態度を翻してそう言った。

「な、なんだと！」

相手を目の前にととうとう冬穰は腕組みを始め、自信に満ちたその目で語り出した。

## 名探偵？ 2

「さきほど言いましたが、窓から飛び降りれば充分密室から脱出可能なのですが、下には植え込みもありましたし、そこに飛び降りれば、死にはしないでしょ」

「はっ！ だからさっき言っただろう！ 私の体型だと、ローブが邪魔で窓から出られなかったんだ！」

「脱げば良いじゃないですか」

「そんな事をすれば体中が枝で傷だらけになってしまいうだろう！どこから見ても分かるぐらいに！ さきほどの身体検査では確かに先日怪我をした多少の傷は残っていたが、裸で植え込みに飛び降りたほどの傷は無かったのだろう！」

「部屋でローブを脱ぎ、そのローブを窓から放り投げてから植え込みに体が傷を負わないようにマットか何かを置いておいてクッションにして、その上に飛び降りればいい、傷はあまり出来ないでしょう」

「ふん、浅はかだな！ 私にはそんなマットなんてそんな物を隠す暇は無かった、私はシャワーを浴びて、それからずっとローブを着ていた！ パーティーで全員の前でその姿でスピーチをして、外に行った途端2階で物音を聞いたのだ！」

「……お聞きしたいのですが、そのスピーチをした時に着ていたのは、本当にそのローブでしたか？」

「なっ、他の客に聞いただろう？ この格好だった！」

「確かに、スピーチを聞いたお客さんに聞いたのですが、なんでも真っ暗なホールで、自分にスポットライトを当てるというやり方で行ったそうですね」

「だからなんだ」

「確かに、スピーチを聞いたお客さんはスポットライトが付いていたとは言いましたが、先ほど詳しく尋ねた所、新しく情報が入りま

した、そのスポットライトは少々眩しかったそうです」

「なっ！」

「赤い印象的なローブ、眩しすぎて直視できなかった、この2つを兼ね備えて考えれば……スピーチをした時の格好は、ひょっとして、赤くペイントした、燃やしてどこでも処分出来る服の大きさの紙かなんかだったんじゃないですか？」

「ど、どういう……」

「つまりこうです、今野氏を自殺に仕立て上げて密室で殺した、しかし、密室から出るには窓から植え込みに飛び降りなければならぬ、しかしローブを着たままだと、邪魔になって貴方の体系では潜れない、だからローブを脱ぐ必要があった、しかし素肌で植え込みに飛び降りれば体中傷だらけになって不自然、だから貴方はローブを着たまま発見者になる為に、本物の赤いローブを植え込みに広げて置き、着ていた紙の服を燃やしてから下着姿で、その植え込みのローブの上に飛び降りた、そうすればその分厚いローブがクッションになり、傷も殆ど出来ないし、燃やした紙のローブの燃えカスなんて、放っておけば風に吹かれて警察が駆けつけるまでには消えてしまう、だから後はそのクッションにしたローブを着て、まるで最初から着ていた様に皆の前に現れて死体を発見したふりをする……これで傷も出来ないし、ローブをずっと着ていた証明にもなる、立証成立です」

「しょ！ 証拠が無い！」

「……クッションにしたローブの傷を証拠にすれば、言い訳する余地が残ります……可能性の薄い、綺麗な立証と、確実な方法で出来る、汚い立証がありますが、どちらが良いですか？」

「い、意味が分からない……」

「では、前者から説明を、飛んでいった燃えカスを探します、その燃えカスから赤い染色と貴方の汗が検出されれば、充分な証拠になります」

「そ、そんな物があるならば、もうとっくに飛んでいつているので

はないのか！ ……あ、あるならな！」

「……では後者にします、貴方が着ているパンツを証拠として提出して頂きたい」

「な、なに？」

閣下は突然飛び出た、あまりに緊張感を欠くその単語に、思わずきよんとしている。

「ローブは植え込みに置いておいたので、汗があまり染み込んでないでしょう、しかしずっと着ていたパンツからは汗が検出される筈です、そう大差無い汗の量が検出される筈です」

「ろ、ローブはパーティーが始る前に着たのだ！ パンツはずっと履いていたのだから大差は出る！」

「ほう、シャワーを浴びたのに、ずっと同じパンツを履いていたのですか」

「そ、そうだ！ それが私のポリシーだ！ 電気代を節約する為のな！」

たかがパンツ1枚の洗濯費の節約の為という、少し無理の出て来た言い訳に、その場にいた全員が、本田閣下に向ける視線を冷ややかにしていた。

「……使用人曰く、シャワーを貴方が浴びる際は必ず洗った物を出すそうです……勿論今日もですよ、つまり、ローブもパンツも汗は殆ど無い状態だった！ では、次の言い逃れを聞きましょうか？

本田さん」

暫くは次の言い訳を考えながら、オロオロしていた本田閣下が、遂に爆発した様に怒鳴りだした。

「ふ、ふざけるなあ！ あいつは自殺だった！ この私が捜査はいいと言っているんだ！ パンツなどふざけたものは提出はしない！ だから証拠も無い！ とつとつ出て行け！ それでもまだ続けるのなら私にも考えが……」

「警察の上層部にでも掛け合いますか？ それとも大臣？ ふつ、どちらも口を揃えるでしょう『シャンラムが相手？ 諦めろ』って



ね」

「な、なんだと……」

「……舐めないで頂きたい、貴方が今相手にしているのはシャンラムの上級捜査官ですよ」

「そ、それはどういう？」

本田閣下が、その言葉を聞いて理解をしたのか、少しおとなしくなり、高圧的な態度を止めて、腰を低くした。

「申し送れました、この名前を言うと、犯人は口を開かない上に、妙にペコペコされて面倒なので警察の皆さんには口裏を合わせて頂きました……冬穰 凜改め、シャンラム上級捜査官、秋風 紅葉と申します、牢屋の中に入った後でも、以後お見知りおきを」

「あ……貴方様があの！」

遂に、紅葉の事を様付けで呼び出したこの男に、最初の態度は見る影も無かった。

「ええ、あの秋風 紅葉様です、こうして態度を翻すお方も珍しくはありません、どうします？ 自供してくれる事をお願いしたい、そうすればその貴方曰く、ふざけた証拠の押収は避けられるかもしれませんよ」

「……わ、分かりました」

そして、犯人の確保を警察に任せて仕事を終えてこの大豪邸を出ると、多くの記者達が紅葉を囲んだ。

「紅葉さん！ どうだったのですか！ 自殺と聞きましたが、貴方が来たと言う事は、やはり殺人ですか？」

「貴方が出て来たという事はもう解決……」

取り囲み、一流芸能人の如くインタビューされる紅葉は面倒そうにこう言った。

「僕の口からは何も言えません、怒られますから！ もうすぐ犯人が警察と一緒に出てくるでしょう、その人達に聞いて下さい！ ……あ」

「殺人なのですわね！」

「おい、やっぱり殺人だ！ 犯人は閣下だあ！」  
「……怒られる」

## シャンラム

2088年。

権力の横暴、法の抜け目、不当な人権、そんなくだらない理由で今でも多くの犯罪が未解決で終了している。

単純に考えて理由は2つとされている。

さきほど例に出した物が示している通り、一般人の常識では考えられない不当な見えない力により、法が完全では無いから。

神が考えたわけでもない、人が考えた法律で平等に人が裁けるなんてことがそもそも不可能だったのだ。

二つ目にそれを捜査から起訴に至るまでに担当する個人の能力の不足。

何千年と語られて来た犯罪の歴史に未解決は付き物、むしろ未解決の方が多いぐらいだ。それを無くす事なんか絶対に不可能。

しかし少なくとも完全に近づける事は出来る。

その対策として、とある1つの国が中世と呼ばれる時代から、世界の国々に呼び掛け、先人が知恵と団結を重ね、長年掛けて何千回という会議を繰り返し、遂に世界が歴史上初めて協力し合い、極秘裏に進めて来たプロジェクトを全世界協力のもと、今から58年前に実行に移した。

『シャンラムプロジェクト』そう呼ばれている。

そのプロジェクトにより、警察と協力し捜査をする、しかし警察とは全く異なる治安維持組織『シャンラム』が創立された。

警察と大きく違うのが、組織の持つ権力の大きさの違いだ。

あきらかにおかしい権力の制圧をするには、さらに上の権力を持つ者が抑え付ける。それしかないと考えた結果の組織だ。

つまり、世界は信頼出来る人材を集めたシャンラムという組織に世界中が了承のうえ、世界最高権力を与え、強引な治安維持を求めた。

そう、異常で不当な法も何も届かない莫大な組織を作ったのだ。  
そして第2の問題として上げられた、個人の能力の問題。

これは誰でもシャンラムに入れる仕組みにするのではなく、少数精鋭とする事にして、頭脳、身体能力、社会の適応性、信頼、全てが世界トップクラスの者のみがシャンラムの捜査官となる資格を得る。

つまり簡潔に述べると、一般人よりも遥かに高い、いや、それよりもさらに高い能力に者に権力を与え、圧倒的な力を象徴にして犯罪を抑え付けて解決する為の組織。それがシャンラムだ。

当然、世間が見てみぬフリをする様な人物だってそうだ。シャンラムの名の下に法は平等に課す。それがシャンラムの存在意義なのだ。

状況証拠は揃っている。しかし証拠が無くて逮捕状が發布しても  
らえず任意同行もできない。

そんな人権をも無視して、シャンラムならば同行を強制できる。  
『必要性さえあればどんなわがままも通る組織』。悪く評価すれば  
こういう呼ばれている。

しかしシャンラムは世間から認められている。  
実際に実績を上げ、世間で言う『平和』がシャンラム誕生以来保  
たれる様になったのだから。

シャンラム設立から、その圧倒的な力と優秀な頭脳で、犯罪率は  
30パーセント低下という異例の実績を上げている。

だが、当然大きな力にはリスクもある。

先ほどの人権を無視して同行を強制する件で例えれば、そんなわ  
がままをしておいて裁判に持ち込みはしたが、免罪だった日には、  
その時点でそのわがままを取った捜査官はシャンラムを考慮の余地  
の無い懲戒処分させられる厳しさ。

つまりこれが誕生して以来のその圧倒的な実績と信頼の理由だ。

そしてこれから起こるのは、世界各国にあるシャンラムの支部。

日本のシャンラム本部が基盤の事件。

今、シャンラム日本本部は世界トップクラスと言って良い実績を誇っている。その理由として、今から3年前、シャンラムの歴史上、革命が起きたからだ。

通常、何歳からでもシャンラムの入所試験は可能だが、大体は大学院を卒業まで命がけで能力を高め、それ以降の入所が殆どだった。そうでもしなければただでさえ天才でさえも入れないと言われているシャンラムの入所試験に能力が及ばないのだ。

しかしその常識が定着していた中で、未成年でまだ15歳の子供が、圧倒的な身体能力と頭脳を持って3人も合格してしまったのだ。

当然その3人の實力には目を見張る物があり、その期待に答えて高い検挙率を誇り、世界が注目した。

そしてその3人の1人と言うのが、圧倒的な推理力を誇るさきほどの秋風 紅葉なのだ。

しかしこれも運命なのか、その革命的な3人を中心とした、世界を変える革命的な事件に3人は己の力で挑む事になる。

## 壊れる平和

話しは戻りその事件から翌日。日本シャンラム本部の紅葉の執務室にて。

「紅！ またバカみたいなことをやってボスに怒られたのか？」  
紅葉と同じ年ぐらいの青年が聞く。

「……なにか悪い？ 凜」

上級捜査官としての執務室で、恐らくボスとやらの怒られたのが原因でやる気のなさそうにあからさまに頬を膨らませながら不機嫌な態度を取りデスクにうなだれる紅葉は、やっぱり不機嫌だった。

紅葉と言う名前から『紅』と言うあだ名で呼ばれている紅葉は、同期の上級捜査官である、榎木 凜に昨日の一件について問いただされているにも関わらず、机にうなだれながらそう言い返した。

この態度を見る限りでは、紅葉は職業柄なのか、事件の時とはあきらかに性格が変わっていた。

ちよっぴり頬を膨らませるなど、心なしか幼く退化している様な気もする。

そんな紅葉に見かねた凜は呆れた表情でこう言う。

「まあ、そりゃ悪いよ、なんでお前そうやって世界最高権力と言われるシャンラムの硬い尊厳みたいのをずかずか壊していくわけ？」

「ああ、はい……」

「ボスが言ってたぜ、『紅葉はシャンラムの敵対組織に金貰ってるんじゃないか？』って、そのせいで、ボスが目を回してた」

「ええ！ ホントお！ いい気味だあ！」

そのボスと呼ばれる上司の困った話を聞くとそれは嬉しそうに紅葉は起き上がって喜んで見せた。とてもイヤな部下だ。

可愛そうにボス……

ボスもこいつに説教なんて馬に念仏を聞かせるより質が悪いこと

ぐらい分かってるだろうに……馬は無害だが、紅は有害なもの。

そんなやりとりの最中、2人の背後から可愛らしく丁寧な声が聞こえて来た。

「良いんじゃないですか？ その分事件を解決してますし、間違った事は言って無いんですから」

そう言いながら、失礼にもノックもせず執務室に入ってきていたのは小柄な紅葉よりも、少し小さく、その声に似合った可愛い顔をした女性だった。こちらも紅葉と同期で革命と呼ばれた3人目の上級捜査官だ。

「やあ、サラ、なにか用かい？」

「ボスが始末書を書いておけだそうですよ」

サラは紅葉のデスクの上に、少し余計ではないかと思われる量の始末書を置いた。

「……なんの始末書？」

「貴方が事件を公開する前に犯人を喋っちゃったことですよ、……あと、警察の方達を巻き込んで、自分の名前を隠していたこと」  
続いて凜がこう言った。

「って言うか、始末書って再発を防止する為に書かせる為なのに、紅に至っては一向に再発が止まらないよな、罰金にすればいいのに」  
凜とサラのその冷たい一言にも、紅葉はなぜかほくそ笑んだ。全く反省していない。

「クッ、必要性が見られればどんなわがままも許される……それがシャンラムでしょ？」

「おう、言い張ってるが、あったか？ あの事件にそんな必要性はある？」

「あの犯人の場合はだね……」

偉そうに語りだそうとする紅葉の言葉を遮り、サラが語りだした。  
「私達はあくまで権力防止の為に警察の捜査に手を貸すだけの存在なんです、表舞台にはあまり出てはいけない存在だ！ とボスが」

紅は無表情で始末書を受け取ったは良いが、ただ一言『ごめんな

さい』と書いた。

「それは反省じゃなくて嫌がらせだぞ」

「いいんだよ別に、どうせもう直ぐシャンラムを止めるんだし」

「……？　なんだって！」

最初に執務室にやって来た凜も、後から入って来たサラも、その意外な紅葉の発言に目を丸くして驚いている。

「なんで！」

「パン屋をやるんだ」

「あ？　なんだって？」

「治安の良くない国でパン屋をやるんだ！　そこでタダ同然でパンを売るんだよっ！　恵まれない人達も喜び、場合によっては犯罪者を改心させる様なパンを……」

色んな感情が高まり、凜は思わずデスクを両手で叩き付けた。

「パンこねて犯罪者がいなくなりゃ！　総動員かけてパン作るわ！」

「いやだって、シャンラムの捜査官ってお給金がかけてパン作るわ！　じゃん、もう3回人生遊んで暮らしていきけるだけのお給料は稼いだし、そのお金で人助けをつてね、秋風家の名のもとにね……」

紅葉の言葉に、凜が感じた感情を言葉にした。

「……お前は頭は良いがバカだ」

「……頭が良いバカ……それって……どういうこと？」

「紅がシャンラムを辞める……じゃあ、やっぱりサラもやめるのか？」

ふ、とため息をつきチラツと見ながら、意地悪くサラに凜がそう言った。

「なんでですかあ！」

そんな事を言われたサラは、おとなしそうな顔に似合わず、発狂しそうな声で怒鳴った。

「いや、紅がやめるなら寿退社を……ね」

「なんで私が寿退社をっ！」

「いや、噂だぜ、シャンラム始まって以来の天才上級捜査官、秋風



と、同じく情報の鬼 上級捜査官、冬穰 サラは付き合ってるって……」

「ここは小学校ですかあ！」

一見ただの18歳の3人だが、実際は、誰もが認める優秀さを誇っている。

2人が幼稚園児並の喧嘩を初めてしまっている間に説明だ。

3人が優秀と言われるのその証拠が、階級である上級捜査官への在籍だ。

これは彼らのボス、つまり本部長が上級捜査官全員に個人的に通り名を付けている。

サラは『ヒューマン・ネットワーク』情報の扱いが上手いことから。

凜は『サイエンス・アイ』科学捜査に長けており、科学捜査班の担当になっているからそう呼ばれている。

そして紅葉……『大聖堂』カテドラル

その紅葉の由来のみ、詳細は明らかになってはいないが、どんな犯罪者をもまるで神の使いの如く見抜き裁いてしまうということから、イメージで付けられたとされている。

そしてこの間にも、サラの凜に対する発狂はピークを迎えていた。よほど恥ずかしかったのだろう。

「そもそもはどうですか！ そんなことを言いふらしている奴は！ 私の全権限をかけて潰……」

「い、いやサラ、お前言って良い事と悪い事があるって、シャンラムの権限を持って、それは言っちゃダメだぜ！」

「凜さん！ 情報源は貴方ですか！」

「うおっ！ （ばれた！ なんて！）」

「消し潰しますよ！」

顔に似合わず、怖い事を言うサラ。こういう方面でからかわれる

事にとんでもなく恥ずかしがる子供の様な思考回路の持ち主だ。

「け、けしつぶす？ 消すだけで良いんじゃないかな……」

「だったら潰して消しますよ！」

「そういう問題じゃ無いんだよ……それよりも紅」

「あからさまに話を逸らさないで下さい！ いい加減にしないと怒りますよ！」

「（今までは怒って無かったのか？）……紅、知っていると思うが……シャンラムOB、OG失踪事件、一応調べておいたら良いんじゃないか？」

「ん？ なにそれ」

紅葉は首をかしげた。

「し、知らないのかよ！ えーっと……実際のところはどうか分からない、別に噂の域を越えないし、あんまりシャンラムに在籍した人物に関係した問題を公にしたくないからシャンラムも警察も様子を見ているらしいんだけど、定年退職ならば何も起きない、だけど途中でシャンラムを退職した奴が今、次々と行方不明になってるっている噂が流れているんだよ、お前を黙って辞めさせる気は無いが、一応な」

「それは『この事件の犯人は……幽霊だ！』と言っている様なものだよ」

「だから俺が言ったことじゃねえよ！ 戸籍や目撃情報は存在するが、その人物を確実に会って話した人物がいないし、尋ねても殆ど留守なんだって、だから名目は行方不明、俺が言ったのではないけど！」

「殆ど留守？」

「ああ、たまに家にはいるらしいよ」

「たまにいるんだったら行方不明じゃないよね、ただ外出が多い人じゃん」

「いや、行方不明なんだよ、おもしろいんじゃないの、外出好きより行方不明の方が噂としては……俺は言っていないけど！」

「ふうん……ああ、うん」

「あっ！ 信じてねえな！」

「信じるものにも、だからそれ行方不明じゃないじゃん」

「誰が何と言っても行方不明なんだよっ！ 俺が言ったんじゃないけどなっ！」

「何でもいいですけど、私仕事がありますから、では」

サラはその2人のやりとりを慎ましく微笑んだあと、御淑やかに執務室を後にした。

「……あいつ、なんであんなに慎ましく微笑むの？」

「爆笑する様な話題でも無いからね、凜に気を使って、慎ましくしたんじゃない？」

「慎ましく微笑む話題でもないけど、あんな顔されるぐらいなら、思いっきり馬鹿にして欲しいよ、でも面倒くせえな……これから俺、この間の強盗事件の調書なんだ、まあ、俺もそろそろ行くよ、じゃあ」  
凜も面倒くさを表現するように頭をかきながな執務室を後にした。

「……暇だなあ」

世界最高機関の上級捜査官とは思えない発言をしながら、紅葉はまたも机にうつ伏せる。ボスに怒られてスネた紅葉の、次の日恒例のプチストライキなのだ。

するとそんな時だった、机の上に置いてあった携帯の昔に流行ったファンタジアアニメの主題歌が鳴り響いた。メールの受信音だ。

どうもこの音楽が鳴るとテンションが上がるため、メールが来るたびに紅葉のテンションが上がる。つまりアニメやら漫画が大好きなのだ。

紅葉は携帯を開く。

「お、桜からだ」

その桜なにがしとやらからのメールに、ニヤニヤしながらメールを開くと、紅葉の笑みは急に消え失せた。桜という存在がなんなのか、その正体はこれから始る物語の中心歯車だった。

『こんにちは、シャンラムの捜査官ともあろうお方に顔をお見せできない無礼をお許し下さい、貴方ならばもう、お察ししているでしょうが……桜さんはお預かりいたしました、現在桜さんの携帯電話から、メールを差し上げております』

その文を何度も何度も読み上げた。

どれだけ頭が良くても理解するのにとてもなく時間が掛かった。  
「ふ……ふざけんなあ！」

常に冷静沈着、笑みを絶やさず全てを把握するそんな紅葉の顔が怒りに震え、思いつき机を拳で叩き付けた。

拳がヒリヒリして、ようやく落ち着いた紅葉は、メールの続きを見る。

『当然、私達の命令に1つでも逆らった場合、桜さんの命はありません』

その文に続いて一通の写真が添付されていた。

「……あばら骨」

そこに写っていたのは、へし折った人体のあばら骨と僅かに隣りに付着している血痕だけが残った木製の机の上だった。

そして写真の奥には、見せしめと言わんばかりに、縛り付けられ横たわる桜が写っている。

## 動き出す

『これが人体の骨だということはお分かり頂けるでしょう、つまり私達に人の死を悲しむという感情はありえませんが……今回の誘拐は営利誘拐……とは少し異なります、桜さんのお返しする条件は後ほど改めて連絡を差し上げます、では早速これから貴方に指令をします、まず誰にも知らせないこと、これは誘拐犯としては当然の処置でしょう、しかし貴方の今現在この世界で最も大切とする桜さん、はつきり申し上げて桜さんを誘拐されて貴方が正常な判断ができるとはとても思えません、こちらには貴方の優秀な頭脳がどうしても必要になるのでこちらは1つの判断をいたしました、2人までこの件を伝え、協力を要請しても構いません、その2人が誰であろうと大丈夫です、その2人が決まり次第、その人物の名前を記名し、メールを返信してください、ただし、もし4人目にこの誘拐の事実が伝わったとき、私達は速やかに桜さんを殺害します、一先ずこれで通信を終えます、では、それぞれの利益のために」

絵文字、顔文字、一切飾り付けの無い、純然たる脅迫状だ。

そのメールに冷静な紅葉は目を剥き、今にも発狂しそうな程だ。

落ち着くまでには暫く時間が必要だった。桜という人物がどれだけ大きな存在かが良く分かる。

しかしこうもしてられない、今は桜の命が第一、そうするとまずは協力者の人選だ。

しかしこれにはそう時間は掛からなかった。

5分後、紅葉は凜の執務室にいた。

そして凜にそのメールを見せていた。何故か添付された写真と、

その写真に付いての内容を取り除いて。

「……なるほど、それで俺を協力者を選びたいのか、外部への協力は勿論、知られる事も許されない、いわゆるちよつと奇抜なクロー

ズド・サークルの状況って訳か」

「うん、協力者は3つの条件を満たす人じゃないとダメだ、1つ目は絶対的に信頼のおける人物、2つ目はそれなりの力を持っている人物、君は科学に長けてるし科学班も動かせる、そして最後、絶対にこの誘拐を秘密にしてくれる人物」

「へえ、嬉しいこと言ってくれるじゃん」

「どう？ 大丈夫……かな？」

「……ふっ、当たり前だろ、嬉しかったよ俺に頼ってきてくれて、お前絶対に俺に仕事の相談とかしないからさ、同期なのに」

「……良かった」

ホッと一息付いた、了承してくれるとは思っていたけど、どうしてもホッとした。

「ところでさ、この誘拐された桜って誰なんだ？ 聞いた事無いぜ」  
それを聞かれた瞬間紅葉の顔が一瞬怖く感じ、思わず凜はきよとんとした。

「……ごめん、それは言えない」

「はあ！ お、おい紅、お前俺に正体不明の人質の救出をしろっていうのかよ！」

「とにかくごめん！ ……それは言えない、残念だけどそれを聞かないと協力してくれないなら、僕は君を諦める」

ここで、追求するのは、多分真相も分からないし、信頼も失う、そう考えた凜は退いた。

「……分かったよ、ところであともう1人はどうする？ 俺的にオススメしたいのは2人だが……」

「サラとボスでしょ？」

「ああ、能力の優れた上級捜査官から選ぶのは勿論として、他のの上級捜査官は恐らく誘拐事件には向かないだろう、だからこの二人、サラの情報能力は世界でも通るほどだ、そしてこのシャンラム日本支部のボスの冠所長……悔しいが経験、頭脳、身体能力、全てを取ってもこれほど心強い人はいないだろう」

「もう決めているよ……サラにね」

「へえ、なんで？」

「サラの力は勿論だけど、残念だけどボスはこのシャンラムの本部長という立場上、これを伝えたら非常線を張って捜査を開始して、大人数にこの事実が伝わりかねない、そうなれば桜の命は無い」

「そうか、分かった」

そして2人は同意の上、サラの執務室に向かい、サラにこの誘拐の携帯メールを見せた。

「ええええええええええ！ ゆーかいですかあ！」

「声でかいよ！ なに！ 嫌がらせ！」

「い、いえ、ごめんなさい……でも紅さん、私を頼ってくれたのですね……ああ」

頬を赤らめて照れるサラ。

その後当然、桜の正体について尋ねられたが、紅葉は断固として口を割らなかった。

「とにかく紅、一旦部屋に戻って、この指示に従って俺達2人の名前を入れたメールを返信してこいよ、それで少し落ち着くんのだ」

「うん分かった、ありがとうね、2人共」

紅葉は大分落ち着いた様子で執務室を後にした。

紅葉がサラの執務室を出て行ったのを見届けると、凜はサラに静かにこう告げる。

「……紅の家族構成を調べておいてくれ、桜というのは血縁関係の可能性が高い」

「え？ 追求はしないのでは？」

「いくら紅の頼みであれ、正体の分からない人質を救出するなんておかしいし、知っていれば断然犯人側の要求にも対応がしやすい、だから紅の家族構成を……」

「違いますよ、紅さんの家族である、両親と妹さんに紅さんを加えた四大家族は紅さん以外既に全員死亡しています、それどころか紅さんの親しい女性の方で今いなくなったという報告はありません」

そのサラが言ったさりげない言葉に、凜は血の気が引いた。

「……家族構成の把握は分かるが、なんで親しい女性の動向まで知ってるんだよ」

「い！ それはまあ同僚の女性関係ぐらいは……」

「じゃあ、俺の小学生の時のクラスメイトの女性を言ってみろ」

「……しかし、紅さんの知っている女性全員が無事、人質に取られた女性の正体は……」

（こ、こいつ！ 最高権限と世界クラスの情報網使ってストーカーしてやがる！ っていうか、やっぱり紅の事好きなんじゃねえか！ 知ってたけど！）

この事の追求は、桜の事を紅葉に追求するのと同じぐらいに危険と感じた凜は追求はしなかった。

「だがなあ……いかれてるよ犯人は、俺達を相手にするなんて、警察に殺人予告を送る様なものだ」

「……ええ、極道の家に優等生が百科事典を武器に突っ込んでいく様な物です」

「なんて例え方するんだ、とにかく、あのメールから読み取れる情報……」

「犯人は複数、残忍、そして目的は恐らく紅さん、もしくはシャンラムへの怨恨、それか私達シャンラムにしか出来ないこと……このどれかでなくては、いくら紅さんがお金持ちとはいえ、紅さんの関係者を誘拐するなんて考えられないです……」

「そうだな……あと1時間ぐらいしたら俺が紅の様子を見に行ってみるよ、犯人からメールの返信があるかもしれない」

「ええ」



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5419w/>

---

ミストリア

2011年9月10日03時22分発行